九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

乙一「陽だまりの詩」論 : アンドロイドが人間になる状況について

河内, 重雄
北九州市立大学文学部 : 准教授

https://doi.org/10.15017/3054021

出版情報：語文研究. 127, pp.48-63, 2019-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

乙一「陽だまりの詩」論

――アンドロイドが人間になる状況について――

河内重雄

一　本稿の狙い

乙一（おついち）「陽だまりの詩（シ）」（『小説すばる』平成十四年六月）は、誕生したての女性型アンドロイド「私」[注1]を主人公とする、一人称の小説である。人類が死滅していると思われることから、時間設定は未来のいつか。場所に関しては無国籍的と言うべきか、特に日本と考える必要はなさそうである。

作品梗概は以下の通り。

目を開けた「私」が傍にいる男に誰かと尋ねると、男は「きみを作った人間だ」と言う。「彼」とともに「私」は地下から地上へと出、二人でこれから生活する家へと移動する。家の食器棚の中に「彼」と白髪の男性の写真を見つけた「私」は、他の人たちはどこにいるのかと尋ねる。「彼」によると、白髪の男性＝「彼」の伯父を含め、ほとんどの人間は突然の病原菌のため、すでに死んでいるという。「私」は「彼」に名前を付けてくれと言うが、「彼」は必要ないと答える。「彼」も病原菌に感染しているため、死んだら伯父の墓の隣に埋葬してくれと「私」に頼む。「私」は家事と「彼」の埋葬をするために作られたことを理解する。

自身の活動がやがて停止することや、「彼」が近く死ぬことについて、最初何とも思わなかった「私」だが、「彼」と一緒に生活するうちに、様々な感情を学ぶこととなる。栽培している畑の野菜をかじる白兎を追いかけて転び、「彼」に笑われ、恥ずかしさと「彼」に対する少しの憎らしさを感じる「私」。太陽やコーヒー、窓飾りにあたる風が作り出す音色な

どを好ましく思うようになった「私」。だが、死についてはまだよく分からない。

「彼」の死が五日後に迫った日、崖から落ちて途中の岩棚に引っ掛かって動けない白兎を「私」は発見する。助けようとした「私」は兎と共に落ち、兎は死んでしまう。少し前まで畑を駆け回っていた兎の死に、胸の奥に痛みを感じて涙を流す「私」は、愛と死は同じものの表と裏だと理解する。「彼」に破損個所を修理してもらいながら、「彼」の遺体をやがて埋葬しなければならないことを「私」は辛く思う。

「彼」の死の当日、自分の命の残り時間を秒単位で答える「彼」に、「私」は「彼」もまたアンドロイドであることを悟る。「彼」はこれまでだましていたことを謝り、伯父に憧れていたこと、人間になりたかったこと、そして伯父の隣に埋葬されたかったことを語る。自分も人間だったらいいのにと思う「私」は、「彼」の気持ちを理解し、「彼」に死が訪れるまで抱きしめていようと思う。この世界に誕生したことを「私」は「彼」に感謝し、やがて「彼」の体内のモーター音は聞こえなくなり、「私」はおやすみなさいと心の中でつぶやく。作品梗概は以上である。

「陽だまりの詩（シ）」（以下、本作とする）にはロボットやアンドロイドといった語は出てこない。これらの語については、石黒浩『アンドロイドは人間になれるか』（平成二十七年十二月　文芸春秋）に次のように述べられている。

> 「ロボット」は、見かけからして機械然としているものである。コンピュータにセンサとアクチュエータ（駆動装置）がついていれば、なんでもロボットだ。
>
> 対して「アンドロイド」は見かけが人間そっくり、ただし中味は機械の「人間酷似型」のもの（見かけだけだと、人間かどうか区別つきにくいもの）を指す。

本作の語り手の外見は人間の女性、「彼」は男性とされている。アンドロイドといった語が出てこないことには意味があるのであろうが、便宜上、語り手たちをアンドロイドと表現してよいであろう。

語り手の「私」と「彼」は人間と言えるか。言い換えれば、アンドロイドを人間としてよいか。本作が読者に問いかけるのは、このような問いと考えられる。以下は本作の一節。

> 私は兎を追いかける最中、たいてい、何かに躓いて転んだ。窓の内側から忍び笑いをする声が聞こえて振りかえると彼が私を見て笑っていた。私は立ちあがり白い服

についた泥を叩き落とした。
「生活しているうちに人間らしくなってきた」
「……きみは人間になりたいと思ったことはあるかい」
話の途中でふいに彼は質問した。私は頷いて、ある、と答えた。
「窓の飾りが揺れる音を聞くと自分が人間だったらいいのにと思います」
「なぜ人間のふりを?」
彼は落ちこんだ声で伯父にあこがれていた心の内側を説明した。伯父とは彼の製作者だった。自分が人間だったらいいのにと私は時々思った。彼もまた同じことを感じていたのだ。
「あなたは愚かです」
「わかっている」
そう彼は言って、胸に耳をあてたままの私の頭に、そっと手を載せた。少なくとも私には彼が人間だろうとそうでなかろうと違いはなかった。私は彼の体を強く抱きしめた。残り時間が減っていく。
「僕は、伯父の隣に埋葬されたかった。自分の上に土をかぶせる存在が必要だったのだ。そのような身勝手のためにきみを作り出してしまった」
本作にはこれらの他にも、「私のように人間でないものは絵を描いたり彫刻をしたり音楽を作ったりすることはできない。」といった一文も見られる。人間とは何か、アンドロイドも人間としてよいかといったことが、本作の大枠のテーマと言えよう。以下、本稿ではこのテーマに即して本作を解釈する。

二　聖書との類似について

アンドロイドは人間かということについて考察する前に、本作の典拠について述べたい。本作における設定はキリスト教の聖書、特に『創世記』に重なるところがあり、聖書が典拠の一つと考えられる。以下、『旧約聖書　創世記』(注2)と本作の類似点を確認する。
よく知られているように、聖書において最初の人間＝アダムを創り、その肋骨から女を創ったのは神である。
そこで神が言われた、「われわれは人をわれわれの像(かたち)

の通り、われわれに似るように造ろう。彼らに海の魚と、天の鳥と、家畜と、すべての地の獣と、すべての地の上に這うものとを支配させよう」と。そこで神は人を御自分の像の通りに創造された。神の像の通りに彼を創造し、男と女に彼らを創造された。

ヤハウェ神が地と天とを造られた日（略）ヤハウェ神は地の土くれから人を造り、彼の鼻に生命の息を吹きこまれた。そこで人は生きた者となった。

（略）彼が眠りに落ちた時、ヤハウェ神はその肋骨の一つを取って、その場所を肉でふさいだ。ヤハウェ神は人から取った肋骨を一人の女に造り上げ、彼女をその人の所へ連れてこられた。

（「一　創造」）

本作ではアンドロイドたちの創造者は人間である。自らに似せて創造する者とされる者が存在する点で、聖書と本作は似ていると言えよう。ついでに言えば、男性型アンドロイドの「彼」が「設計図」により女性型の「私」を作るのも、男が先行している点で、アダムの肋骨から女が造られることを思わせる。

アダムとその妻エバは、「人とその妻とは二人とも裸で、たがいに羞じなかった。」（「二　創造」）とあるように、最初裸であることを恥だと感じていない。本作の「私」も誕生してすぐ「私は何も身に着けていなかった。」と気付くが、「彼」に対し恥ずかしく思っていない。これもよく知られていることだと思われるが、アダムとエバが裸であることに恥ずかしさを覚え、無花果の葉でそれぞれ前垂れを作るのは、エデンの園で蛇に騙され、智慧の樹の実を食べたからである。

（略）そこで女はその樹を見ると、成程それは食べるのによさそうで、見る眼を誘い、智慧を増すために如何にも好ましいので、とうとうその実を取って食べた。そして一緒にいた夫にも与えたので、彼も食べた。するとたちまち二人の眼が開かれて、自分たちが裸であることが分かり、無花果樹の葉を綴り合わせて、前垂を作ったのである。

（「二　堕罪」）

聖書において、アダムとエバが最初に示す感情は恥ずかしさと言える。本作においても、「私」が示す最初の感情は恥ずかしさである。

家に戻っても彼はまだ笑っていた。私にはよくわからなかった。しかし笑われたことでむずむずした。胸の奥がかゆいと思った。体温が上昇してどう振る舞えばいいのかわからずひとまず頭を掻いた。なるほど、どうやらこれが「恥ずかしい」という感情なのだなと思った。「くすぐったい」に似ていた。そしていつまでも笑っている彼が少し憎らしかった。

恥ずかしさの直接の原因は「彼」に笑われたことだが、笑われるきっかけをつくったのは、「私をあざ笑うように畑の中を駆け」る兎という小動物である。聖書の「狡猾」な蛇に重なると言えよう。さらに言えば、「私」が恥ずかしさの次に示す感情は、引用にもあるように「憎らし」さだが、聖書で人間が示す次の感情は怒りである。

（略）しばらくして、ある時カインが農作物の中からヤハウェに供物（そなえもの）をしたことがあった。アベルはアベルでまたその群の初子とその脂身の中から選んで供物をした。ヤハウェはアベルとその供物を御照覧になったが、カインとその供物は顧みられなかったので、カインは大いに怒ってその顔を伏せた。

（「三　カインとアベル」）

周知のように、怒ったカインはこのあと弟のアベルを殺してしまう。本作の「私」はこの直後、「彼」に出す食事で意地悪をする。

「僕のサラダやスープに入っている野菜は、全部、兎のかじった跡があるのに、きみの食べているものはなぜそうじゃないのだろう」

「偶然でしょう。これは確率の問題です」

私はそれだけ言って、兎の歯形のついていない自分のサラダを食べた。

程度の差はあれ、憎しみの感情が示されたすぐ後に、憎い相手への攻撃が見られる点も、共通していると言えよう。

聖書ではノアの時代に、大洪水でほとんどの人や動物が死滅している。本作でも「私」と「彼」の二体のアンドロイド以外、人らしき登場人物は直接的には出てこない。「彼」は病原菌のため「ほとんどの人間がすでに息絶えている」と言い、「私」は「人間がすべていなくなった世界を、彼だけが死なずに今まで生きてきたのだ。」と語っている。「ほとんど」と「すべて」、多少の食い違いはあるが、人類が壊滅的な状態にあるという意味で、ノアの大洪水に重なると考えられよう。

聖書では神がノアに箱舟の作り方を教える。三階建ての構造の船で、全ての生物を雄雌二匹、やがて繁殖できるよう、入れるように指示している。本作に出てくるのは男と女のアンドロイドが一体ずつ。「私」たちが生活しているのは、一階と二階、屋根裏部屋のある三階建ての構造の家である。また、「私」は「彼」に、「彼」は人間に、帆船の作り方を学んだとされる場面がある。

帆船の持っていた部分が唐突に外れた。床に落下して胴体部分のほとんどが音を立てて分解した。ばらばらになったブロックを集めながらどうしようかと思った。（略）

そのときひとつだけ私でもブロックで作り出せるものがあることに気づいた。思い出しながら帆船を組み立てた。一度、彼が製作する様を見て記憶していた。ひとつずつ彼がかつて目の前で行なった手順を繰り返す。そうすることで私にも帆船を製作することはできた。

（略）彼はおそらく、以前に他の人間がブロックから帆船を作り出したところを見ていたのだろう。だから、帆船を組み立てることができた。

創造者である人から「彼」が帆船の作り方を学ぶのは、神からノアが箱舟の作り方を教わるのと重なると言えよう。

以下は細かい類似点だが、聖書では太陽の光が闇を払うものとして重視されている。本作でもタイトルが示すように、太陽は「彼」や「私」の愛情の対象として価値化されている。また、聖書では、人にアダムという名を付けたのは神である。後述するが、本作でもアンドロイドの起動時に人間がアンドロイドに名を付けることになっており、創造者が創造物に名を付ける点も共通していると言える。特に『創世記』との類似点ではないが、本作では墓にあるものは墓石などではなく、十字架とされている。これなどもキリスト教を思わせよう。

では、なぜキリスト教的な設定が本作ではなされているのか。筆者が特に注目するのは最初に挙げた類似点、神が自分に似せて人間を造ったように、人間がアンドロイドを製作したということである。以下は黒崎政男『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』（昭和六十二年十月　哲学書房）の一節である。

ほぼ一世紀前に我々は、自らを動物との連続と不連続において学ぶ機会があった。それまでは、人間とは、動物ではないものであった。そのパラダイムが崩されるときに、人間についての思想は深まる。しかし、さらに以

前には、人間は自らを、神との同一性と差異とにおいて捉えようとしてきた。

そして、我々はいま、ちょうど一世紀以前に体験したと同様の事態にいる。我々はまさに、人工知能（AI=artificial intelligence）という存在（もちろんアンドロイド型ロボットというにはまだまだ途方もなく不完全ではあるが）との連続と不連続において、人間とはなにか、を学びとるという時代に遭遇しているのである。

人は自分に似た存在があると、自身と対象とを比較してしまう。どこが同じでどこが違うのか、人間とは何かが問われることになる。本稿では、本作を人間とアンドロイドの連続、不連続という観点から解釈するが、キリスト教的設定は、このような観点の妥当であることを保証する側面があると考える。

三　唯一無二の存在として互いに接すること

本作では、嘘をつくなどの言語能力や外見などに関しては、人間とアンドロイドは同じと設定されている。本作における人とアンドロイドの違いは、絵や音楽の創造や、名前を付けるという行為ができるか否かという点にある。

彼によると、私は、設計図のあるものやあらかじめ手順の決まっているものしか作ることができないそうだ。例えば、音楽や絵などは生み出せないという。だからばらばらのブロックを前にして私は何もできなかった。

「……あなたが私に名前をつけなかったのは、絵や音楽を作り出せないのと同様に、名前を生み出すことができなかったからですね？」

手順が決まっているものしか作ることができないというのは、絵や音楽を作り出せないということの言い換えに等しい。では、手順の決まったものしか作れないことと、名前を付けることができないことは、どのように関係するのか。

名前は固有名詞である。固有名詞は、名付けられた対象を唯一無二の存在たらしめる。例えば、ありふれたボールペンに「太郎」と名付ければ、その「太郎」という名を与えられたボールペンは、この世でかけがえのない、取り換え不可能な存在とされる。本作のアンドロイドたちは成人の平均的な言語能力をもっている。対象に名前を付ける時は、どこの国

でもある程度限られた範囲から選んで付けると思われる。だとすれば、例えば千程度の人名のリストをアンドロイドにインプットし、その中から交際範囲にない名前をランダムに選んで付けるような機能をアンドロイドにもたせるのは、たやすいことではあるまいか。

であるにもかかわらず、本作のアンドロイドたちは名を付けることができないとされている。これは次のことを意味する。すなわち、本作において、人間とアンドロイドの決定的な違いは、対象を他ならぬこれたらしめることができるか否かという点に、唯一無二の存在を作り出せるか否かという点にある、ということである。アンドロイドたちは決められた手順に従って、同じものを作ることはできる。これは、アンドロイドは固有名詞のレベル（唯一無二のこれ）とは関われないが、一般名詞のレベルと関わることはできる、ということに他ならない。

人間がいない世界であるため、アンドロイドがアンドロイドを起動させているが、本来は、起動した人間がそのアンドロイドに名前を付けて使用していたと思われる。

「私に名前をつけてください」

彼に提案した。テーブルに肘をついて彼はしばらく窓の外を見つめていた。庭の地面を覆っている芝生の上を蝶が飛んでいた。

「必要ないだろう」

動物と違い外見が人間に似ていて、名前（固有名）を与えられるだけでは、アンドロイドは人間たりえない。アンドロイドに名を付けたとしても、アンドロイドは唯一無二の存在（固有名詞）である以上に、アンドロイド（一般名詞）として見られるからだ。人は、人間（一般名詞）である以上に、かけがえのない存在（固有名詞）として見られる。私たち人間は相互に、他ならぬこの人たらしめ合って生活している。例えば私たちが店で買い物をする時、客と店員、お互いに相手の名を知らなくても、お互い相手を唯一無二の存在として接している。相手を客（一般名詞）として、店員（一般名詞）として接するその根底には、常に固有性の意識が横たわっている。人間の人間たるゆえんは、外見的な特徴や感情等もさることながら、固有性の意識にある。私たちがアンドロイドを固有名以上に本質的に一般名詞のレベルで見てしまうのは、アンドロイドが私たちをそれぞれ唯一無二の存在として見ず、人間（一般名詞）として見ているからだ。事実、本作の「私」は「彼」を名前（固有名）で一度も呼んでいない。対象を他ならぬこれた

らしめる（＝名前を付ける）ことができない相手（アンドロイド）を、かけがえのない存在として、誰も見ようとはしない。

しかしながら、本作のように、男女のアンドロイドが一体ずつしか存在しない状況となると、話は違ってくる。アンドロイドたちにお互いに唯一無二の存在たらしめる力が無くとも、状況がお互いをかけがえのない存在たらしめてくれるからだ。小説の最後の方、「少なくとも私には彼が人間だろうとそうでなかろうと違いはなかった。」と「私」は思っている。このことは、「私」が「彼」を人間やアンドロイドという一般名詞のレベルでではなく、取りかえのきかない対象として見ていることを示している。対象を唯一無二の存在として接することができるのが人間だとすれば、状況により、「私」と「彼」はお互いに人間にし合っていると言うことができる。小説の最初、「彼」が「私」に対し「きみを作った人間だ」と言っているのは、その意味で間違っていない。

前述のように、人間とアンドロイドの差は、芸術作品を作り出せるか否かという点にもあるという。「私」を人間と言えるとすれば、彼女は芸術作品を創り得るのであろうか。

本作のタイトルは「陽だまりの詩（シ）」である。詩について、本作には次のような一節がある。

地下で目覚め、はじめて外へ出たとき、白くなった視界と体表面の温度でしか太陽を理解しなかった。しかし今の私が思う太陽はもっと深い意味を持ち、たぶん詩の世界でしか表現できない、心の内側と密接に結びついたものになっていた。

風さえも飾りを揺らして音楽を作る。しかし私は何も生み出すことができないのだ。それが残念だった。会話の中で詩のような表現を使ったり嘘をついたりすることはできた。しかし私にできる創造はせいぜいそれだけだ。

対象を愛する心を表現したものが詩。そして「私」にも詩的な表現を使ったり、嘘をついたりすることは可能だという。「私」が「彼」についた嘘に関しては、兎の歯形のついた野菜の一件などがある。「彼」も「私」に「五十歳に近い」などと嘘をついている。詩的表現と嘘は、現実を何らかの形で認識した上で、そこからずれた表現を意図的に使う点で共通している。

本作における詩的表現については、兎の死を「私の腕の間から体温が流れ落ちていくようだった。」と語っているところや、「彼」の死後に「布団をかぶせるように土を載せよう」と

思うところを挙げることができよう。後者に関して、土については「載せる」以外にも「かぶせる」と表現することもできる。土を載せることを「布団をかぶせるように」と譬えているのは、かぶせるという動詞を軸に、目的語を土から布団へとずらしていると考えられよう。死は永遠の眠りとも言うが、布団は眠りとも関係のあることは言うまでもあるまい。

無論、詩的な表現は表現であって詩ではない。詩と呼ぶのであれば、それなりの分量が必要であろう。例えば、次の一節などは詩とは呼べないだろうか。

感謝と恨みを同時に抱いているなんて、おかしいでしょうか。でも、私は思うのです。きっと、みんなそうなのだと。ずっと以前にいなくなった人間の子たちも、親には似たような矛盾を抱えて生きていたのではないでしょうか。愛と死を学びながら育ち、世界の陽だまりと暗い陰を行き来しながら生きていたのではないでしょうか。

そして子供たちは成長し、今度は自分が新たな命をこの世界に創造するという業を、背負っていたのではないでしょうか。

あの丘の、あなたの伯父が眠る隣に、私は穴を掘ります。そしてあなたを寝かせて、布団をかぶせるように土を載せようと思います。木で作った十字架を立てて、井戸のそばに咲いていた草花を植えようと思います。毎朝、あなたに挨拶をしに行くでしょう。そして夕方には、一日に何があったのかを報告しに行きます。

先に挙げた「布団をかぶせるように」は、この一節の最後の段落にある。表現に関するずれが詩の目印になるとすれば、この一節には目印が二つある。「布団をかぶせるように」に加え、文末表現が他の地の文と異なっている。これまでの地の文では敬語表現は使われていない[注3]が、この一節の文末表現は全て丁寧語である。また、対象への愛の表現が詩の要素とされているが、この一節は死にゆく「彼」への愛を語っている。「私」たちは名前を付けることができないため、タイトルは付け得ないであろうが、この一節は「私」から「彼」へ捧げられた詩と考えてよいのではあるまいか。だとすれば、「私」たちは絵や音楽は創れないが、詩という芸術作品は生み出せることになる。

芸術作品を創作でき、お互いに固有名詞のレベルで接することができる「私」や「彼」は、「彼」の伯父同様、人間だ。これはあるいは穿ち過ぎかもしれないが、「彼」の伯父も実はアンドロイドではあるまいか。実際、小説中に「彼」の名前

は一度も出てこない。これは、伯父もアンドロイドであったため、「彼」に名前を付けることができなかったからではないだろうか。[注4] だとすれば、伯父が自らを葬らせるために「彼」を作り、「彼」が自身を埋葬させるために「私」を作り、「私」もやがて死が近付くとアンドロイド＝人間を一体製作する、というように、延々と続いていくことになると考えられる。

私も、自分が死ぬときに彼と同じことをする可能性があった。設計図や部品、工具などは地下倉庫にそろっているのだ。まだそのときになってみなければわからないが、孤独に耐えかねたとき、寄り添うための新たな命を私は生み出すかもしれない。だからこそ、私は彼を許すことができた。

寿命が尽きかけているアンドロイドが、別の型の新しいアンドロイドを一体作る、その繰り返しである。人として人に葬られるためにも、作るアンドロイドは必ず一体でなければならない。一対一の状況が繰り返し生まれ、彼らは人間として葬られ、人間として葬り続けることになる。「彼」は死の一週間前、二百年前に亡くなった伯父との思い出を「私」に語る。

彼は伯父の話をした。伯父といっしょにトラックで廃墟の中を進んだことや、廃墟の町からまだ使えそうなものを運んできたときのことなどの話だった。

彼は頷いてまた伯父の話に戻った。伯父といっしょに何週間も廃墟の町を探索したときの思い出だった。

彼が深く伯父を愛しているのがわかった。だからその隣に埋葬されることを希望しているのだ。そのために私は作られた。人間の『死』を看取るために。

伯父がアンドロイドであるとすれば、「彼」にとって伯父がかけがえのない存在、人間であるのは、同じく状況によると考えられよう。ちなみに伯父の名も本文には一切出てこない。

本文には、「愛と死は別のものではなく同じものの表と裏だった。」という一文がある。本作のタイトルは「陽だまりの詩（シ）」と、「シ」というルビが振られている。死（シ）は愛と同じであり、愛を表したものが詩（シ）である。タイトルから、作者はアンドロイドたちを、壊れるではなく一回限りの死（シ）をむかえる存在として、人間として捉えようとしていると言える。作者の意図というレベルで考えても、「私」たちを人間とするのは妥当ではあるまいか。

お互いに唯一無二の存在として接し合うのが人間だとすれば、アンドロイドも状況によっては人間である。状況次第で人間とアンドロイドの間の決定的な溝は跳び越えることができる、というのが、本作に固有のメッセージと考える。

四　状況という視点

大橋洋一『新文学入門』（平成七年八月　岩波書店）の「第四講　読者の運命――受容理論」の冒頭で、二つの俳句が紹介されている。その二つの俳句を丁寧に解釈した後で、大橋氏は次のように述べている。

ここで皆さんを騙そうとするつもりはまったくなかったことを明言した上で、お話しすれば、じつはこのふたつの俳句は黒崎政男著『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』に紹介されていたコンピューター俳句なのです。つまりコンピューターがつくった俳句です。比較的簡単なプログラムでコンピューター俳句ができるらしいのです。（略）このコンピューター俳句との遭遇をとおして、わたしたち読者が、文学テクストに接するときに何が起こるかが明瞭にみてとれるように思えるのです。

このふたつの俳句がコンピューター俳句であることを最初隠しておいたのは、皆さんを驚かせるという茶目っ気を発揮したかったのかもしれません（略）けれども、それ以上に、人間ではなく機械が作ったものをも鑑賞できる可能性を、たしかめてみたかった。最初からコンピューター俳句だとわかっていると、たとえば、なるほどこれは俳句の体裁をいちおう整えているが、心がないとか、情緒が薄っぺらだとか、イメージがゆがんでいるといったような、ありとあらゆる否定的な意見がでてきそうで、かんじんの俳句の読みのプロセスがかえりみられなくなってしまう。（略）

たとえば機械ではなく人間がつくった俳句にも、心がなく情緒が薄っぺらなものは、やまのようにあるのに、それをコンピューター俳句とは呼びません（略）。逆に、どんな俳句もそれがコンピューター俳句だとわかった瞬間に読む気がしなくなる人が、すべてとはいわなくとも多い――ここでいう読むとは、精密な読解や解釈もふくみます。

俳句は最も短い詩だとすれば、本作が発表された当時、すでにコンピューターが芸術作品を創作するというのは、ある

程度現実のものとなっていた訳だが、それはさておき、コンピューター俳句だと分かると読む気がしなくなる人がいる、というのは事実であろう。コンピューターには心がないから読むに値しない、というのは、前掲の『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』の言葉を借りると、「知能というものはある存在者（人間やコンピューター）そのものに内属している性質」だとする「知能の実体論的把握」である。近年はこのような実体論的把握への反省から、コンピューターと人間（観察者）との関係性において、コンピューターの知能や心について考える研究者が増えてきている。大橋氏が受容理論という、読者（観察者）との関係性を重視する批評理論の解説でコンピューター俳句を取り上げているのも、そのことと無縁ではない。以下は『哲学者はアンドロイドの夢を見たか』の一節である。

（略）大澤によれば「心は、他者とともに世界に内属する者に対してのみ存在する」（七一頁）のであり、「機械において心が成立していない」（七四頁）ことがさしあたり主張されている。しかし、同時に「機械が心をもつことを阻むものは原理的にはなにもない」（同）点も大澤の主張である。つまり、心を持つ機械が可能か否かの問題において肝要なのは、その答えが、「人間が自己自身に対して抱く自己了解とともに変容する」（同）点である。

「現代の資本主義は、人間が十九世紀に確立した特殊な自己了解の基礎を切りくずしつつ進行している。……やがて、我々は、自己像を大きく変容させ、我々人間と他の諸存在者との区別を本質的なものとみなすことを、やめてしまうかもしれない。このとき、そのことの反作用として、我々は、機械やモノを心あるものとして感受することができるだろう。」（七四頁）

筆者は大澤の結論に基本的には賛成したいと思う。ここには心の「関係論的把握」の重要な側面が言い表されている。（略）

つまり、「思考する機械は可能か」という問いは、例えば、月に到着するようなロケットは可能か、とか言った純粋に技術的な問いとは次元を異にする。ＡＩ問題は、人間とはなにかという問いを不可避的に巻き込まざるを得ないような全く別種の問題なのである。

最後に、人工知能問題に対して、筆者の立場を簡単に述べておこう。といっても、基本的な態度はすでにこれまでの叙述のうちで表明してきた通りである。それでも、「機械は心をもち得るか」という問いに yes/no で答えることが、人工知能問題の最終目的であるかのように考えるのは正しくない、ということだけは明らかにしておきたい。

なぜなら、すでに見てきたように、人工知能問題というのは、純粋に技術的な問題、例えば、有人火星ロケットは可能か、などといったたぐいの、いわば客観の側だけで一応話が済む問題とは異なり、どうしても観察者の側の問題が不可避的に条件として絡まざるをえない問題だからである。このことは、これまで明らかにしたように、「知能の関係論把握」の視点が人工知能問題では少なくとも不可欠な条件である、ということの言い替えである。

機械に心はあるのかという問いに対する答えは、機械だけを見ていても出すことはできない。観察者たる人間との関係性を視野に入れ、本質論を排して考える必要がある。黒崎氏の主張はこのようにまとめられよう。また、『アンドロイドは人間になれるか』（前掲）には次のような一節がある。

> 演技をするロボットのなかに、心のメカニズムがあるのではない。心とは、他者との関係性のなかで「感じられる」ものだ。心は、見る者の想像のなかにある。見る側の想像をどれだけ豊かにするかが、ロボットに心があると思わせるかどうかを決めるのだ。それが、これからのロボットがひととかかわれるかどうかを左右する。
>
> （「第2章　アンドロイド演劇」）

ひとは、他人の内面を見ることはできない。他者の振る舞いから、抱いている感情を想像するだけである。ということは、ロボットに対してある特定の振る舞い方をプログラミングすることができれば、その動作を見た人間は、ロボットがある特定の感情を抱いているかのように思えるのである。それが人間であれロボットであれ、うつむいて暗い声を出せば悲しみのサインとして、バンザイすれば喜んでいるサインとして受けとるのだ。

感情は、もっとも単純な情報通信手段である。そしてその感情表現を実装させることは、ロボットに対して人間らしさを感じさせるためのカギとなる。

僕らはすでに、女性型アンドロイドのジェミノイドFに、相手の言ったことが分からないときには機械のように「わかりません」と端的に返すのではなく、「いや私、わからへんわそれ」というような感じで、より感情を込めて返答をするようにプログラムをしている。こうするだけで、コンピュータの能力的な限界によって答えられないのではなく、答えられないことをあたかも反省しているように、人間らしく聞こえる。（略）

とくに感情をもっともよく表すのは、表情である。人は、表情から相手の感情を読み取る。アンドロイドの表情と人間の表情、どちらが豊かなのか。人間は二〇本から三〇本の筋肉を使って、非常に複雑な表情を作る。しかしアンドロイドは、必要であれば三〇本だろうと四〇本だろうと、人間以上の筋肉を顔に取り付け、人間以上にエレガントに、豊かな表情を再現することもできるのだ。

（「第4章　美人すぎるロボット」）

アンドロイドに心があるか否か、言い換えればアンドロイドを人間と思えるか否かは、見る人との関係において決まる。そしてアンドロイドを人間のように見せる上でポイントとなるのは感情表現である。このようにまとめることができよう。だとすれば、やはり気になるのは、「感情を抱いているかのように」、「人間らしさ」、「人間らしく」などの表現である。「人間以上にエレガントに、豊かな表情を再現」できるにもかかわらず、「らしさ」が消えることがないとすれば、関係性や感情表現以外の何かが、人間が人間であるためには不可欠なのではあるまいか。

本作から読み取ることができるのは、アンドロイドがアンドロイド（一般名詞）でなくなるには、相互に相手をかけがえのない存在とみなして接することが必要だ、ということである。これは関係論的な把握と言える。そして、アンドロイドが男女一体ずつしか存在しないような状況では、必然的に、相互に固有名詞のレベルで接することになる。お互いに唯一無二の存在として接し合えるのが人間だとすれば、このような状況にあるアンドロイドは人間と呼ぶことができる。アンドロイドを人間とすることができるかという問いに関しては、固有名詞という視点、状況という視点もあることに気付かせてくれる点に、本作の個性があると考える。

注

注1　以下、「陽だまりの詩（シ）」本文の引用は乙一『ZOO1』（平成十八年五月　集英社）による。なお、本稿における引用文中の傍

線は全て筆者によるものであり、ルビは適宜省略した。

注2　第六十九刷改版、関根正雄訳、平成十一年六月、岩波書店。

注3　例外的に、「なぜ作ったのですか。」(p194) という一文がある。

注4　「彼」の名前が出てこないことについては、伯父がアンドロイドである可能性もあるが、前述のように「私」たちアンドロイドが相手（主に人間）に対し、固有名詞のレベルで接しないことと関係があるのかもしれない。

（こうち　しげお・北九州市立大学文学部准教授）